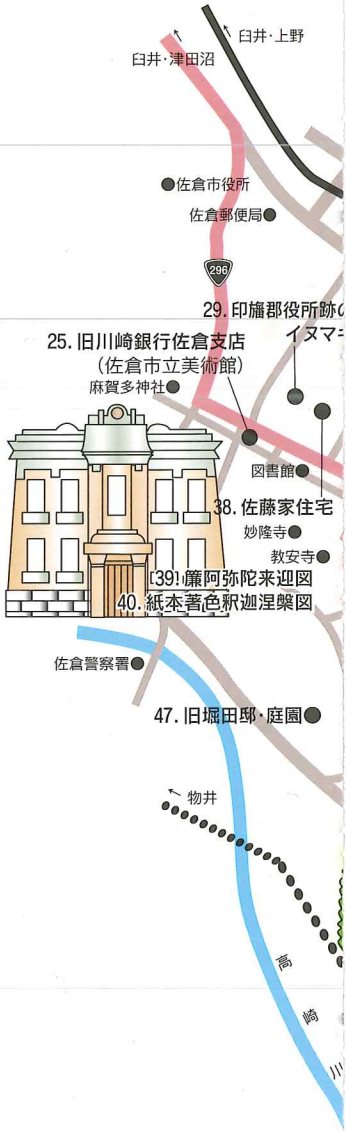
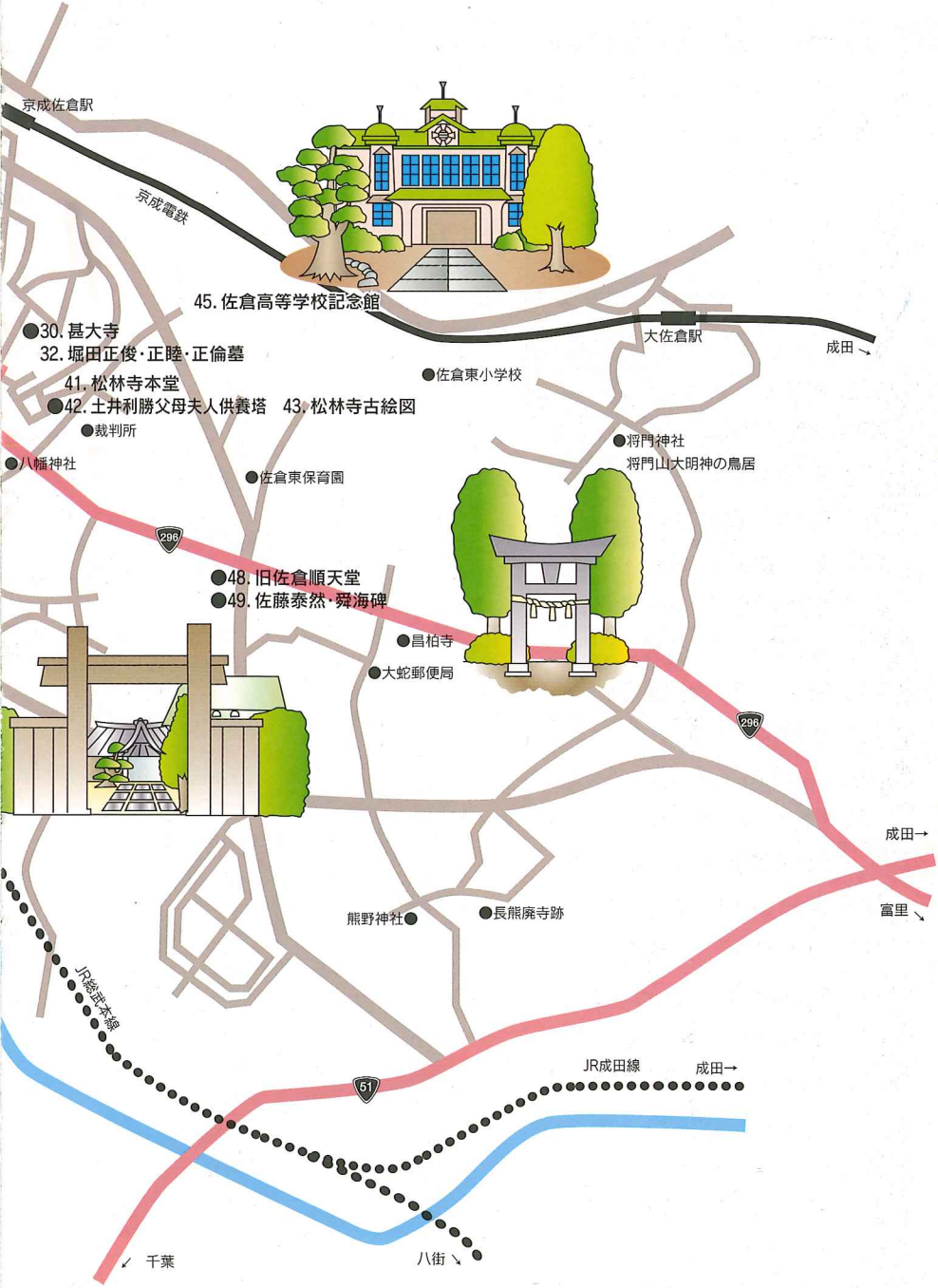
【佐倉地区】 B

25. 旧川崎銀行佐倉支店(新町) ……38
26. 佐倉町内祭礼用具(新町・弥勒町) …38
27. 佐倉囃子 ……39
28. 佐倉新町おはやし館(新町) ……39
29. 印旛郡役所跡のイヌマキ(新町) …40
30. 甚大寺(新町) ……40
31. 銅　十一面観音菩薩立像(新町) …41
32. 堀田正俊・正睦・正倫墓(新町)……41
33. 佐倉城大絵図(新町)……42
34. 鳳凰蒔絵鞍(新町) ……42
35. 天球儀(新町) ……43
36. 伝堀田正盛坐像(新町) ……43
37. 銅　武内宿禰立像(新町)……44
38. 佐藤家住宅(中尾余町) ……44
39. 簾阿弥陀来迎図(新町) ……45
40. 紙本著色釈迦涅槃図(新町) ……45
41. 松林寺本堂(弥勒町) ……46
42. 土井利勝父母夫人供養塔(弥勒町) …46
43. 松林寺古絵図(弥勒町)……47
44. 地域交流施設(鍋山町)……47
45. 佐倉高等学校記念館(鍋山町) ……48
46. 鹿山文庫関係資料(鍋山町)……48
47. 旧堀田邸・庭園(鏑木町) ……49
48. 旧佐倉順天堂(本町)……49
49. 佐藤泰然・舜海碑(本町) ……50
50. 佐藤尚中陣羽織(裏新町) ……50
51. 刀　銘細川忠義(新町) ……51
52. 刀　銘国友忠恕(新町) ……51
53. ピストル(新町) ……52
54. 小幡家旧蔵佐倉城関係資料(新町)…52




京成佐倉駅
京成電鉄
45. 佐倉高等学校記念館
●30. 甚大寺
32. 堀田正俊・正睦・正倫墓
41. 松林寺本堂
●42. 土井利勝父母夫人供養塔
43. 松林寺古絵図
●裁判所
大佐倉駅
成田
●佐倉東小学校
●将門神社
将門山大明神の鳥居
●八幡神社
●佐倉東保育園
296
●48. 旧佐倉順天堂
●49. 佐藤泰然・舜海碑
●昌柏寺
●大蛇郵便局
296
成田→
富里
熊野神社●
●長熊廃寺跡
JR総武本線
JR成田線
成田→
51
千葉
八街

25

きゅうかわさきぎんこうさくらしてん
旧川崎銀行佐倉支店

新町にある煉瓦造２階建、銅板葺、外壁タイル張り、正面腰部分板張りの建造物は、大正７年（1918）に川崎銀行佐倉支店として建築されました。設計者はドイツ留学の経験がある建築家の矢部又吉です。又吉はドイツ風の建築手法を用いた建造物を多く手がけ、特に銀行の建築を得意分野としていました。

この建造物は、川崎銀行佐倉支店として使用されたあと、金融恐慌や国の政策などにより合併を繰り返し、昭和12年（1937）に佐倉町に売却されて町役場となり、昭和29年（1954）の市制施行により佐倉市役所となりました。昭和46年（1971）に市役所が海隣寺町に新築移転すると公民館として、その後、昭和51年（1976）から７年間は市立図書館として利用されました。そして昭和61年（1986）からは佐倉新町資料館として利用され、平成６年（1994）11月からは市立美術館のエントランスホールの役目を持っています。

26

さくらちょうないさいれいようぐ
佐倉町内祭礼用具

これは旧佐倉町（横町、上町、二番町、仲町、肴町、間之町）と弥勒町の祭礼用具で、山車・御神酒所とそれに伴う山車人形・飾り幕などからなっています。

仲町の山車は３階造りで、人形と3階部分は滑車と縄を用いて上下できるようになっている典型的な江戸型山車です。

山車人形は６町内にあり、横町は「石橋」、上町は「日本武尊」、二番町は「玉の井」、仲町は「関羽」、肴町は「竹生島」、弥勒町は「八幡太郎義家」です。

飾り幕は各町内とも豪華なものです。上町の幕は雲間に龍を刺繍し、肴町の幕は魚貝づくしの刺繍です。

佐倉の秋祭は、麻賀多神社・八幡神社の祭礼として例年10月に行われます。

写真：仲町の山車

27

佐倉囃子（さくらばやし）

佐倉囃子は江戸囃子の流れをくむ祭囃子で、粋で軽妙な曲調を特色としたお囃子です。毎年秋の麻賀多神社祭礼の際には、この祭囃子にのって、各町内の山車や御神酒所が曳き回されます。

楽器及び演奏者は、篠笛１人、大太鼓１人、小太鼓（締太鼓）２人、鉦１人の５人編成です。

曲目は「屋台」「昇殿（しょうでん）」「鎌倉」「四丁目」「あがり屋台」があり、「五囃子」と呼ばれています。このほかに「仁羽（にんば）」という曲もあり、大拍子という横長の締太鼓が加わって賑やかに演奏されます。

昭和35年（1960）に佐倉囃子保存会が結成されて技術の向上、後継者の育成が行われており、祭礼のほかにも市内外の各種の行事に出演することも多く、好評を博しています。

28

佐倉新町おはやし館（さくらしんまちかん）

江戸時代の商人の町、新町にある佐倉新町おはやし館では、秋の麻賀多神社祭礼で引き回される山車人形が２点展示され、佐倉の伝統・文化に根差した秋祭りの様子が紹介されています。

郷土の文化・伝統行事・物産の紹介や、観光情報の提供が行われているほか、城下町めぐりの休憩所としてもご利用できます。

２階では佐倉囃子の練習が行われ、貴重な民俗芸能の伝承の場としても活用されています。

開館時間	午前９時～午後５時
入館料	無料
休館日	月曜日（祝日の場合は火曜日） 年末年始
問合せ	043-486-4992

29

印旛郡役所跡のイヌマキ

イヌマキはマキ科マキ属に属する常緑高木で、暖地の山地に自生する雌雄異株の樹木です。

種子は10月ごろに熟し、その下に肥大した花托（かたく）ができます。花托は濃紅色から紫色に変わり、肉質で甘味があるので食べられます。木目が通る材は耐久性に富み、シロアリの害をうけにくいので建築材として使われます。

千葉県では南部に植栽されており、県外にも庭木として出荷されています。マキは県内では生垣、防風林として広く利用されており、昭和41年（1966）には千葉県の木に指定されました。

印旛郡役所跡のイヌマキは、敷地の東南の一角に植えられており、樹高12m、目通り幹囲３mの雌株の大樹です。樹勢はなお旺盛で、年々新葉を伸ばしています。市街地のマキとして貴重な存在です。

30

甚大寺

新町にある安城山不矜院（ふきょういん）甚大寺は、不動明王を本尊とし、市内唯一の天台宗寺院です。院号の不矜院は、貞享元年（1684）に従兄弟稲葉正休に刺殺された堀田正俊の法号に由来します。延暦寺の末寺でした。

甚大寺は、元和９年（1623）に南光坊天海大僧正により出羽国山形城下に創建され、元禄14年（1701）に山形藩主堀田正虎が再興したと伝えられます。延享３年（1746）に山形藩主堀田正亮（まさすけ）が佐倉へ移封するにともない佐倉の現在地に移されました。堀田氏は甚大寺に120石を寄附しています。

この地には延宝６年（1678）から貞享３年まで佐倉藩主にあった大久保忠朝（ただとも）時代には本性寺があり、元禄14年から享保８年（1723）まで佐倉藩主にあった稲葉氏時代には臨済宗妙心寺派の養源寺がありました。『古今佐倉真佐子』には「門少内へ入てくずやふき。左右ひしぎ竹のへい。此下大土手。土手前丸竹こまよせ有る。門内左右より向へ押廻杉いけ垣、四角にはさむ也」と記されています。

寛政年間（1789～1801）に佐倉藩主堀田正順により勧請された金比羅大権現は、毎月10日の縁日に多数の人で賑わいます。

31

どうじゅういちめんかんのんぼさつりゅうぞう
銅十一面観音菩薩立像

この仏像は、新町の安城山不矜院甚大寺にあります。高さ46cmで台座とともに一鋳の蝋型から製作されています。左手に瓶中蓮を持ち、右手は掌を前方に向けて下げ、五本の指を伸ばした状態の立像です。

佐倉出身の金工家津田信夫の力作であり、荘厳な雰囲気をかもしだしている作品です。なお、この像には次のような箱書があり、その来歴がわかります。

「此ノ十一面観音菩薩像ハ故正倫公ガ特ニ東京美術学校教授津田信夫ニ嘱シテ謹作セシメ、日夕恭敬崇信セラレタル仏像ナリ、今御祖先、御歴代諸精霊御菩提ノタメ之ヲ甚大寺ニ安置セラル矣

昭和十乙亥年六月十八日

伯爵　堀田家　　家扶　入江胖　謹識」

32

ほったまさとし　まさよし　まさともはか
堀田正俊・正睦・正倫墓

新町の安城山不矜院甚大寺に堀田正俊・正睦・正倫の墓があります。

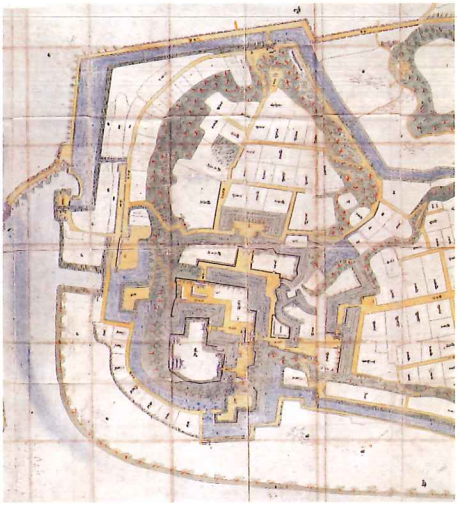
寛永11年（1634）生まれの正俊は堀田正盛の三男で、５代将軍徳川綱吉のもとで昇進をとげ、若年寄、老中を経て、天和元年（1681）には大老にまでなりますが、貞享元年(1684) 8月28日に従兄弟の稲葉正休に江戸城内で刺殺されました。51歳でした。この正俊の墓は昭和11年に浅草の金蔵寺から移されたものです。墓は９㎡あり墓石には「不矜院殿又新叢翁大居士」と刻まれています。

文化7年（1810）生まれの正睦は堀田正時の子です。兄の正愛の養子となり、家督を継ぎ、藩政刷新を図りました。また、幕府の老中として外交に尽力しました。安政6年（1859）に隠居し、元治元年（1864）３月21日に55歳で死去しました。墓は18㎡あり墓石には「故佐倉城主侍従従四位下紀文明公墓」と刻まれています。

嘉永４年（1851）生まれの正倫は正睦の子で最後の佐倉藩主です。明治２年（1869）６月に佐倉藩知事となり、後には殖産興業や藩子弟の教育に尽力しました。明治23年に鏑木町字諏訪尾余に別邸（旧堀田邸）を構え、明治30年には私設の堀田家農事試験場を開設しています。明治44年１月11日に61歳で死去しました。墓は18㎡あり墓石には「従二位勲三等伯爵紀正倫卿之墓」と刻まれています。

33

さくらじょうおおえず
佐倉城大絵図



佐倉城の絵図はこの大絵図を含め、何種類かが残されています。各種の佐倉城絵図を比較すると、佐倉藩主が土井利勝・堀田正信・大久保忠朝時代の比較的古い城絵図（分類Ａ）とそれ以降の稲葉正知・松平乗邑・堀田正愛・堀田正睦・堀田正倫時代の城絵図（分類Ｂ）とで、特に佐倉城内の広小路・中下町周辺の武家屋敷区画が大きく変貌していることが判明します。

作成年代不明のこの佐倉城大絵図は分類Ｂに属するものです。その中でも細部を検討すると稲葉正知時代以前のものであることがわかります。つまり、この佐倉城大城絵図は佐倉藩主が戸田忠昌・戸田忠真・稲葉正往であった時のいずれかの時代のものと考えられます。

東西が3.93m、南北が1.66mあるこの佐倉城大絵図からは、城内や城外の構造、樹木の状況を窺い知ることができ、貴重な資料です。

34

ほうおうまきえぐら
鳳凰蒔絵鞍

佐倉藩主であった堀田家に伝わる馬具で、鞍、鐙、障泥から構成されています。堀田正吉が徳川家から拝領したものと伝えられます。

騎手が腰を乗せる鞍は、前輪高さ27.8cm、後輪高さ26.7cm、馬挟前31.8cm、馬挟後39cmの軍陣鞍です。総体は黒漆に金粉の地蒔を施し、前後両輪の表に大きく鳳凰の舞い飛ぶ姿を金蒔絵で豪華に描いています。人がまたがる横木の居木の裏面には「元和３年(1617)11月日」の紀年銘と作者の花押が刻まれています。

騎手が両足を乗せる鐙は、総高26cm、長さ30.8cmの舌長鐙です。鞍と同様に黒漆に金粉の地蒔を施し、強く張って鳩胸に鳳凰を大きく金蒔絵で描いています。

泥よけの障泥は革製で、表全体に金箔を押しています。

いずれのものも意匠、製作が優れており、工芸品としても歴史資料としても貴重なものです。

35

天球儀（てんきゅうぎ）

江戸時代に製作された天球儀の多くは寺社などに奉納され、学術研究や教育に使用された形跡はあまりありません。

その中で半径29.5cmのこの天球儀は、「織女」「北斗」「天廟」など伝統の暦学によった中国以来の漢名で星座名が墨書されています。天球儀の来歴は不明ですが、おそらく藩校成徳書院の算測量部門で使用されたものと考えられます。

制作者・製作年代についても不明ですが、広瀬秀雄氏は「南極附近に諸星が記入されていないことと、天の河が金粉で描かれている点等は古式を存している。この形式と星の位置の予備調査の結果、製作は寛政末―文化初と考える」と述べています。

天球儀は、当時天文学の研究には不可欠のものであったと考えられ、佐倉藩の学問水準と自然科学に対する姿勢を示すものとして貴重です。

36

伝堀田正盛坐像（でんほったまさもりざぞう）

この像は佐倉藩主となった堀田正盛の像と伝えられており、近江国宮川（おうみ みやかわ）藩主堀田家に伝来したものです。

像の高さは冠の頂より23.4cmで、袖張りは25cmです。檜材を用いた寄せ木造りです。目は玉眼であり、衣冠束帯を着け、右手に笏（しゃく）を持ち太刀を腰に下げ座っている姿の像です。

信濃国松本藩主であった堀田正盛は、寛永19年（1642）から佐倉11万石の藩主となりました。3代将軍徳川家光の信任が厚く、その片腕として幕府で重要な役職につきました。慶安4年（1651）に将軍家光が死去すると、正盛はその後をおって殉死しました。

この像の作者は不明ですが、全体的に工芸的手法を重視しており、佐倉藩主にかかわる歴史資料として貴重です。

37

銅（どう）　武内宿禰立像（たけのうちのすくねりゅうぞう）

この像に銘文はありませんが、佐倉出身の金工家津田信夫（つだしのぶ）（1875～1946）が、堀田正久氏の誕生を祝う旧佐倉藩士の人たちの要請により制作したものです。

武内宿禰は堀田氏の祖とされ、像の高さは43cm、蝋型から作られています。原型は沼田一雅によるものです。

像を側面から見ると逆三角形です。上体部は動的で、その動きを逆三角形の頂点部の二本の足で支えています。節度ある正面観に比較して、側面感には意欲的な造形精神が窺えます。

津田信夫は明治８年（1875）佐倉に生まれ、東京美術学校卒業後、大正８年（1919）同校の教授となり、帝展第四部工芸部門の開設に奔走し、職人的感覚の工芸界を芸術の世界に高めました。

38

佐藤家住宅（さとうけじゅうたく）

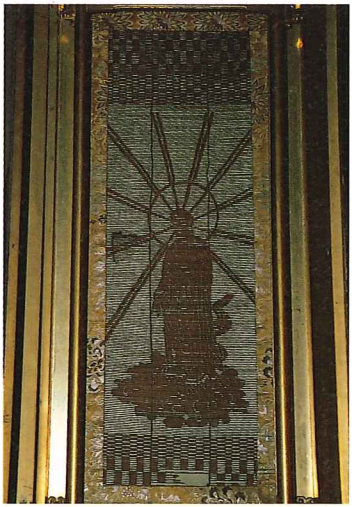
佐藤家住宅は、佐倉城外の武家屋敷地のひとつ中尾余（なかびよ）町にあります。建物の外観や内部の意匠が良好に残されており、建築年代は江戸時代の後期と考えられています。

建物の規模は、間口6.5間、奥行５間の寄棟造です。屋根はもともと草葺きでしたが、昭和56年に、その外形を保ったままカラーベスト葺に改変されました。

間取りは、玄関の土間の奥に３畳敷の「玄関の間」を設け、その右側に接客用の8畳の客間と６畳間を前後に並べています。この６畳間は、主人の書斎兼応接間のような部屋であったと思われます。左側は家族居住用の空間となり、８畳間と５畳間があり、その奥には台所があります。便所は家の中に３カ所もあり、それぞれ使用者によって使い分けていたと考えられます。このような接客や家庭内の秩序を重視した間取りは、武家屋敷に特徴的な間取りといえます。なお、北側の浴室と南側玄関の庇は後世の増築です。

39

すだれあみだらいごうず
簾阿弥陀来迎図



阿弥陀来迎図とは、阿弥陀如来が音楽を奏する菩薩をしたがえ、五色の雲に乗って、往生者を西方浄土に迎えにくる様子を描いたものです。

この図は、新町の浄土宗教安寺に伝わるもので、細長い板状の竹の簾に、図柄の部分だけを残して阿弥陀如来が来迎する様子を表現しています。大きさは縦91.8cm、横29.2cmあり、作者や製作年代については不明ですが、寺伝では江戸小石川の伝通院から拝領したものとされています。

この図に表現されている阿弥陀如来は、左手を上げ頭から10対の後光を発している姿で、図を納めている厨子の背後の扉を開いて明かりを入れることにより、阿弥陀如来の姿を一層浮かび上がらせるという優れた着想による作品であり、当時の浄土信仰の広がりを示すものとして貴重です。

40

しほんちゃくしょくしゃかねはんず
紙本著色釈迦涅槃図

この釈迦涅槃図は新町の浄土宗教安寺に伝わるもので、これを納めた箱の蓋裏に、作者が下総国検見川（千葉市）の画工文居であること、製作年代は文政年間（1818～1830）であることが墨書されています。

釈迦涅槃図とは、釈迦が沙羅双樹のもとで亡くなるときの様子を描いたもので、図中で釈迦は右脇を下にして横たわり、周囲に諸菩薩や様々な衆生が描かれています。

この涅槃図は集まっている動物が50匹と多く、中に蟹や貝が描かれているのは、海との関係が深い房総の風土性が表れていると思われます。全面にわたって豊富な彩色を施したあざやかな作品で、涅槃図の形式が整った鎌倉時代以降の方法で描かれています。

この図は縦2.605m、横2.295mあり、これを納めた箱身の底には、上町、二番町、仲町、肴町、間之町、弥勒町、八軒町の商人の母や妻17人の世話人名が墨書されており、佐倉城下の商人の女人講の仏教信仰を考える資料として貴重なものです。

41

しょうりんじほんどう
松林寺本堂

弥勒町にある玉宝山松林寺は、阿弥陀如来を本尊とする浄土宗の寺院です。慶長15年（1610）から寛永10年（1633）まで佐倉藩主にあった土井利勝により創建されました。玉宝山という院号は、利勝の養母の法号玉等院と養父の法号宝光院に由来します。

松林寺の本堂は、本来は千手観音を本尊とした観音堂でした。間口３間、奥行４間で、屋根は寄棟造りの瓦葺きです。簡素で端正な造りで、従来の佐倉地方の建造物には見られない数々の特徴があり、近畿地方ないし江戸からの工匠の手になる建造物と考えられます。

三葉葵紋を扉の内側に配した厨子に安置されている秘仏の千手観音は、２代将軍徳川秀忠の持仏を秀忠の乳母春日局が拝領し、それを土井利勝が譲り受けたものと伝えられています。この千手観音は、宝暦10年（1760）に３月から60日間にわたり江戸麹町の心法寺で出開帳を行っています。

現在、本堂の間取りは大きく改変されていますが、柱、組物、中備、垂木、隅木、須弥檀などの主要部分は、建築当初の部材が使われています。

42

どいとしかつふぼふじんくようとう
土井利勝父母夫人供養塔

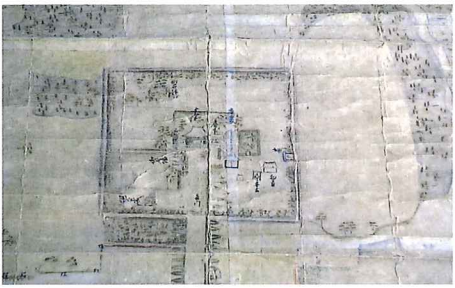
弥勒町の玉宝山松林寺に３基の宝篋印塔があります。土井利勝が養父、養母、正室の菩提を弔うために造立した供養塔です。

中央の塔は、慶長３年（1598）７月11日に死去した養母土居利昌の室（葉佐田則勝の長女）の供養塔です。33回忌にあたる寛永７年（1630）７月11日に造立されもので「玉等院殿清誉壽安大禅定尼」と刻まれています。正面向かって左側の石塔は、慶長11年（1606）９月11日に死去した養父土居利昌の供養塔です。寛永7年7月11日に造立されたもので「宝光院殿本誉見貞大禅定門」と刻まれています。

右側の石塔は、元和３年（1617）９月５日に死去した正室の供養塔です。13回忌にあたる寛永７年９月５日に造立されたもので「清光院殿浄誉明徹大姉」と刻まれています。佐倉藩主稲葉氏時代の『古今佐倉真佐子』に「土手の上に高さ六七尺斗の大石ひ（碑）一つある。土井大炊頭殿（利勝）母公の塚也」と記述されるのは、母ではなく正室のこの供養塔です。享保２年（1717）頃には松林寺で正室の100回忌の千部会供養が行われています。

43

しょうりんじこえず
松林寺古絵図



弥勒町の玉宝山松林寺の絵図は、縦80cm、横80cmの寸法です。土手で方形に囲まれた広大な境内に配置された表門、本堂・廊下・庫裡（明治17年に取り壊し）、毘沙門堂、観音堂（現在の本堂）、物置、井戸、御石塔３基、御石塔跡、裏門などの様子や門前の参道両側には杉並木が描かれています。

本堂の本尊は阿弥陀如来、観音堂の本尊は、徳川秀忠の持仏と伝えられる千手観音で、毘沙門堂の本尊は、徳川家康の五男武田信吉が領地の本佐倉陣屋に祀っていたのを移したとされる毘沙門天です。

『古今佐倉真佐子』によれば、佐倉藩主稲葉氏時代に本堂前には土井利勝の正室清光院の寛永７年（1630）石塔１基のみがありました。それが、この絵図では現在のように養父宝光院、養母玉等院の寛永7年石塔を併せ３基が本堂前に描かれていることから、稲葉氏時代以後の時期に作成されたものと考えられます。

養父と養母の墓は三河国碧海郡土居村から松林寺に改葬されたといわれ、御石塔跡には塚と巨木が描かれています。そこで、養父と養母の寛永７年石塔は、当初はこの塚上にあったものと思われます。

44

ちいきこうりゅうしせつ
地域交流施設

地域交流施設（Sakura Cultureel Centrum）は、鍋山町の県立佐倉高等学校の施設で、平成11年（1999）11月に開館しました。藩校として創立した佐倉高校が、明治32年（1899）に県立に移管されて100周年の記念事業の一環として校内に建築されました。

１階には展示室と研修室があり、２階は収蔵庫となっています。展示室には鹿山文庫関係資料（県指定文化財）など多数の古書籍、順天堂関係書籍、旧制佐倉中学校時代の教材・教具などが展示されているほか、佐倉高校出身の長島茂雄読売巨人軍監督の写真などの展示コーナーがあります。

開館時間　午前10時～午後４時30分
入館料　無料
休館日　月・火・水曜、年末年始
問い合わせ　佐倉高校　484-1021

45

さくらこうとうがっこうきねんかん
佐倉高等学校記念館

鍋山町の県立佐倉高等学校記念館は、旧佐倉藩主堀田正倫（まさとも）の寄付により明治43年（1910）に建築され、当初は本館として使用されていました。塔やドーム屋根をもつ明治期の木造洋風建造物として貴重です。建物の規模は、間口34間、奥行5間で、建坪は222坪です。

県立佐倉高等学校は、寛政４年（1792）に佐倉藩主堀田正順（ほったまさあり）が開設した藩校佐倉学問所の流れを汲みます。佐倉学問所は文化2年（1805）に温故堂と改称され、天保7年（1836）には成徳書院に拡充改組されました。明治4年（1871）になると印旛県立学校となり、明治6年には私立中学の鹿山精舎として開校し、明治21年に佐倉集成学校として開校、明治32年から県立に移管されています。以後、千葉県佐倉中学校、県立佐倉中学校と校名が変更され、明治43年に宮小路町から鍋山町に移転新築となり、県立佐倉高等学校、県立佐倉第一高等学校、県立佐倉高等学校と校名が変更されて現在に至っています。

昭和50年（1975）に改修工事が行われ、現在は主として学校の管理棟として使用されています。

46

ろくざんぶんこかんけいしりょう
鹿山文庫関係資料

鍋山町の県立佐倉高等学校が所蔵する典籍群は、寛政４年（1792）開設の佐倉学問所以来収集された藩校の蔵書を主体とし、明治初年の困難な教育環境のなかでも蔵書の引継ぎが行われ、県立学校への改組を経て現在に至りました。明治時代の移行期には官収や散逸もあり、藩校時代の蔵書は減少しましたが、教育の近代化を物語る明治期の刊行書も加わり両者一括の教育関係資料として重要です。

洋学関係の蔵書中、江戸時代の四大蘭和辞典といわれる「ハルマ和解（わげ）」「ドゥーフ・ハルマ」「和蘭字彙（おらんだじい）」「訳鍵（やっけん）」を始め、天保10年（1839）に購入された「リンネ博物誌」などは、わが国における重要な典籍として高く評価されています。

また、藩校の中心施設であった先聖殿に掲げられていた「先聖殿」扁額、明治43年（1910）の校舎落成記念に旧佐倉藩主堀田正倫から寄贈された江戸佐倉藩邸先聖殿に安置されていた木造孔子像のほか、藩校の各部屋に掲げられていた扁額も伝わっており、当時の教育の理念などを示す資料として重要です。

47

旧堀田邸・庭園

旧堀田邸は、最後の佐倉藩主堀田正倫の別邸として、明治23年（1890）７月に竣工したものです。現存している建物には、主屋・土蔵・門番小屋・茅門があります。旧堀田邸の主屋は木造平屋一部二階建、屋根は寄棟造桟瓦葺です。屋根の一部は銅板で葺かれています。主屋には消失している部分もありますが、その間取りに近世武家住宅の形式を引き継ぎつつ、近代の新しい生活に併せた部分も見ることができ、明治期における上級和風住宅の特色を良く残しています。

庭園は、当時屈指の庭師であった伊藤彦右衛門が設計造園したものです。眼下の高崎川や対岸の台地、水田を借景とし、庭全面に広がる芝に景石や松・百日紅などが配されています。園内の茅門には、正倫が自書した「孤山余韻」の篇額が残されています。

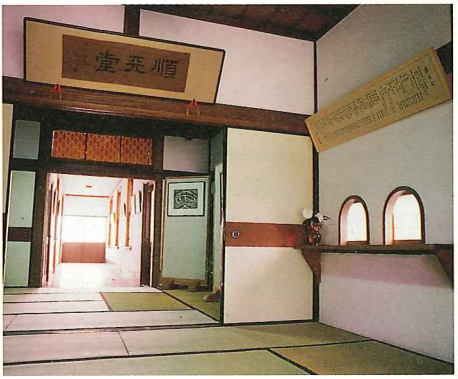
このような明治期における和風建築と庭園が共に残された旧大名家邸宅の遺例は、全国的にも珍しいものです。

48

旧佐倉順天堂

佐倉順天堂は、天保14年（1843）に佐倉藩主堀田正睦（当時は正篤）により佐倉に招かれた蘭方医佐藤泰然が開いた蘭方医学の病院と塾です。当初は、現在地の向かい側にありましたが、安政５年（1858）に現在地に新築されました。往時の順天堂の規模は明治26年（1893）「日本博覧図」によって知ることができます。この図には院長宅や病院棟など多くの建物が確認できます。その内現存する主屋は、明治初年頃と大正10年（1921）に増築、修理が行われています。また主屋の玄関西側部分は、後年切り詰められています。

順天堂には日本各地から塾生が集まり、当時としてはかなり高度な医学を実地に学んでいました。特に外科手術の様子は順天堂の門人であった関寛斎の手になる「順天堂外科実験」に詳細に記されています。この順天堂は、のちに明治時代の医学界をリードする人材が育成された由緒ある史跡であることから、昭和50年には千葉県指定史跡になっています。昭和60年には佐倉順天堂記念館として公開し、近代医学の黎明期の様子を今に伝えています。



49

佐藤泰然・舜海碑

仙台石を用いた佐藤泰然碑（不可諼碑）は、高さ1.88m、幅1.4mの巨碑で、旧佐倉順天堂（佐倉順天堂記念館）の裏手の本町街区公園にあります。泰然（1804～72）の徳をたたえるため、明治23年（1890）５月に佐藤舜海（1848～1911、旧名岡本道庵、佐藤尚中の養子）により造立されました。「不可諼碑」（諼るべからざる碑）の篆額（上部の篆書の部分）は、旧佐倉藩主堀田正倫（1851～1911）の筆になり、碑文は続豊徳が撰文し佐治自謙の筆になります。泰然は、武蔵国稲毛（神奈川県）で旗本伊奈家の用人佐藤藤佐の子として生まれました。のちに医学を志して長崎に遊学し、蘭方医学を学びました。そののち、佐倉藩主堀田正睦（1810～64）に招かれて佐倉城下の本町に蘭医学塾順天堂を開き、多くの医師を育成しました。

この佐藤泰然碑の脇には、佐藤舜海の徳をたたえるため、生前の明治35年（1902）９月に造立された佐藤舜海碑（佐藤舜海先生頒徳碑）があります。同じく仙台石を用いた高さ2.2m、幅1.3mの巨碑で、「佐藤舜海先生頒徳碑」の篆額は堀田正倫の筆になり、碑文は続簡が撰文し斉藤利恒の筆になります。

50

佐藤尚中陣羽織

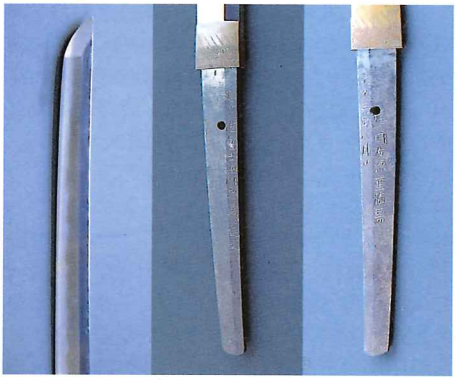
この陣羽織は、佐藤尚中（1827～82、旧名山口舜海、佐藤泰然の養子）が着用したと考えられるものです。大きさは身丈87cm、裄69cmです。この陣羽織の背には佐藤家の家紋である源氏車が付けられています。

尚中が着用した機会については、元治元年（1864）の水戸天狗党の追討に佐倉藩の医師として従軍した折りと、慶応４年（明治元年、1868）の戊辰戦争に佐倉藩が官軍として出兵した際の２回が考えられます。

この種の陣羽織は幕末期に使用されたもので、尚中の遺品としてのみならず、幕末期の兵制を考える上でも貴重な資料です。

51

刀　銘細川忠義



文化12年（1815）に生まれた細川忠義（正行）49歳の時の作刀です。

この刀の全長は71cm、反りは1.5cmで、茎には次の銘が刻まれています。

（表）　総刃佐倉士細川忠義造之

（裏）　文久三年八月　日

　　應國友源重慎需

銘により文久３年(1863)８月に国友重慎の求めに応じて製作したことがわかります。

細川忠義の初銘は「正行」で、佐倉藩の刀工となった際に「忠義」に改めました。佐倉藩における身分と禄高は会所物書、拾三俵二人扶持でした。

52

刀　銘国友忠恕

この刀の全長は71.6cm、反り1.7cmで茎には次の銘が刻まれています。

（表）　下総國佐倉臣國友忠恕作

（裏）　弘化四未年正月吉日

幼名を為五郎、通称を文助といった国友忠恕は文政４年（1821）に生まれ、堀田正俊以来、代々鉄砲鍛冶として堀田家に仕えていた国友家の七代目にあたる登助の養子となりました。

忠恕は天保13年（1842）４月から佐倉藩主堀田正睦に鉄砲鍛冶として仕えています。この刀は、その銘から弘化４年１月、忠恕27歳の時の作刀であることがわかります。

忠恕は明治32年（1899）３月に79歳で死去し、墓は鏑木町の久栄山妙隆寺にあります。

53

ピストル

パーカッション式(管打式)のこのピストルは国友忠恕(ただゆき)の製作と推定され、銃身長16.5cm、口径1.3cmのものです。

このピストルについて有馬成甫氏は「米国と親密な関係にあった老中としての藩主堀田正睦(まさよし)が、米国から贈られたものを模作させたのではないか」と述べています。

佐倉藩では、天保13年（1842）頃より従来からの武衛流砲術のほかに、高島流の西洋砲術をとりいれました。のち、安政2年（1855）の兵制改革で武衛(ぶえい)流は廃止され、高島流のみとなりました。

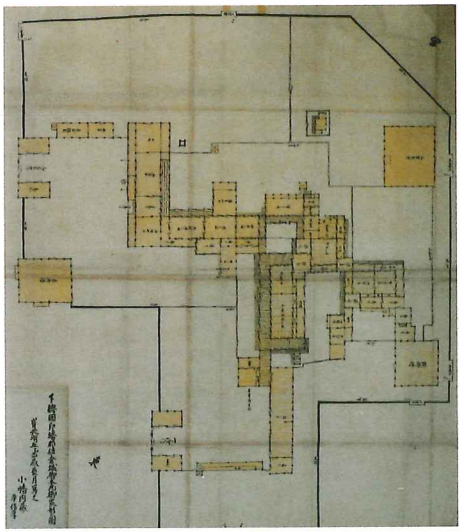
このピストルは、幕末期の佐倉藩の兵制を考える上でも貴重な資料です。

54

小幡家旧蔵佐倉城関係資料（おばたけきゅうぞうさくらじょうかんけいしりょう）

天明5年（1785）に小幡内蔵信厚が写した下総国印旛郡佐倉城御本丸御家形図1葉（87×75cm）、下総国佐倉城絵図1葉（60×103cm）、本丸御殿・三ノ丸御殿・成徳書院などでの儀式を示した天保15年（弘化元年、1844）6月改の佐倉藩御坐拵之図(こざこしらえのず)1冊2巻（全33図）の3点があります。これらは、佐倉城の構造を知る上で貴重な資料です。

小幡家は安中藩主・古河藩主となった堀田正俊以来代々堀田家に仕えた家系です。最後の佐倉藩主堀田正倫代の分限帳によると、幕末の小幡内蔵は禄高120石で大目付でした。



佐倉の城下町の特色

「佐倉」という地名は、戦国時代までは千葉氏の本拠地であった本佐倉城の城下、現在の酒々井町本佐倉一帯を指す地名でした。

慶長15年（1616）に佐倉地方の領主となった土井利勝が、鏑木（かぶらぎ）村の鹿島山に城を定め、計画的に新しい城下町をつくってから後は、こちらが「佐倉」と呼ばれるようになりました。

佐倉の城下町は、それまでの鏑木村の中の馬の背のような台地にまったく新しくつくられました。そのため、鏑木村が台地を挟んで南北に分断された形になりました。

現在でも「鏑木町」という町名が、新町のある台地を挟んで分かれていることがその名残（なごり）です。

佐倉の寺院について

佐倉市には寺院の数が多く、また宗派が様々なのも特徴です。それらは特に、佐倉地区（旧城下町）と臼井地区（臼井、臼井田、臼井台）に集中しています。これはこれらの寺院の多くが、それぞれ佐倉城主、臼井城主との関係の中で創建されたためです。

市内の寺院で一番数が多い宗派は、真言宗です。それに日蓮宗が続きます。

数が少ない宗派としては、天台宗の甚大寺（新町）、黄檗宗の大雄寺（角来）、時宗の海隣寺（海隣寺町）、光勝寺（臼井田）があります。

多くの寺院を巡ることによって何か新しい発見があるかも知れません。

＊各寺院の所在地等については、巻末付属資料の「佐倉市内寺院一覧」を参照してください。